



特集 講演録

信長正室濃姫をめぐる



岐阜市教育委員会社会教育課長

講師：内堀信雄氏

PROFILE (うちぼりのぶお)
昭和34年 栃木県宇都宮市に生まれる。
昭和61年 名古屋大学大学院文学研究科(考古学)卒業。
岐阜市教育委員会にて信長公居館跡発掘調査、長良川鶴岡習俗調査などを担当。
現在、岐阜市教育委員会社会教育課長
主な著書
『守備所と戦国城下町』高志書院、平成18年
『小牧山城・岐阜城・安土城』[中世城館の考古学]高志書院、平成26年

今年は、1567年に信長公が岐阜に入城し、岐阜と命名してから450年という節目の年です。現在岐阜市では、「信長公ゆかりのまち・岐阜市」を都市ブランドとして発信すべくさまざまな周年事業が実施されています。
そのなかで、本誌では先月号より信長公にまつわる講演内容を特集いたしました。今月号では去る5月10日に開催しました当所女性会会員総会において、岐阜市教育委員会社会教育課長 内堀信雄氏をお招きし「信長正室濃姫をめぐる」と題してご講演いただきました内容をご紹介します。
この講演録を通して、まだまだ知られていない「濃姫」の人物像などを思い描いてみる機会となればと思います。

1 はじめに

今年2017年は、織田信長公が本拠地を岐阜に移し、当時稲葉山城と呼ばれていた城の名と井ノ口という町の名を「岐阜」と命名してから450年目の記念すべき年です。岐阜市では節目の年として「信長公450プロジェクト」と銘打った「織田信長公岐阜入城・岐阜命名450周年事業」が練り広げられています。

本日は、信長公の正室「濃姫」がいったいどんな人物だったかを、当時書かれた記録類、江戸時代以降伝えられてきた伝承、研究者の諸説などを紹介しながら、皆様と一緒に想像していきたいと思っております。

2 信長と濃姫について (関連年表・関連略系図参照)

織田信長は1534年、尾張国(今の愛知県西部)で生まれました。濃姫はその翌年、1535年に「美濃のまむし」と後世呼ばれた斎藤道三の娘として今の岐阜市で生まれました。濃姫の方が1歳年下です。当時美濃国(岐阜県南半分)を治めていたのは、最後の守護(現在の県知事)の土岐頼芸です。東濃地方に土岐市がありますが、源

氏の一族である先祖が、地名を名字としたのが土岐家の始まりです。斎藤道三は土岐頼芸の家臣でした。もともとの生え抜きの家臣ではなく、父の代から仕えて出世し、親子二代で実力ナンバーワンの土岐家重役になりました。

信長の父親は織田信秀といいますが、信秀は尾張の国の守護(県知事)や守護代(副知事)よりも低い身分の人物ですが実力は最強。道三とよく似ています。1535年(36年頃)、道三が美濃国内で力を伸ばしてきた時期、道三と、道三に反対する武将たちが国内を二分する激しい争いを繰り広げます。この反道三勢力の盟主は、前守護・土岐頼武(頼芸の兄)の息子頼純です。かれらの戦いはどうなったかというところ、一度は仲直りをするものの、1544年に再び大合戦が起きます。織田信秀や頼純、頼純に味方する越前(福井県)の軍隊が美濃国内に侵入、道三の居城・稲葉山城の城下まで迫ったところで、大逆転して道三が大勝します(略系図①)。

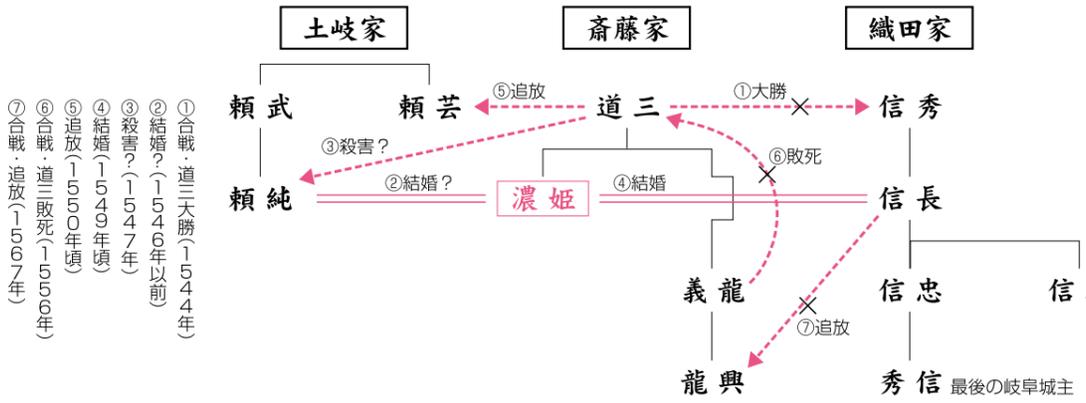
直後の1546年に道三と頼純は仲直りしますが、この頃、頼純と道三の娘の濃姫が結婚したという説があります(略系図②)。これは、道三が土岐家と縁組みするこ

資料1 関連年表

※数字は資料2と対応

年	信長の年齢(数え年)	出来事
1534	1歳	織田信長誕生。
1544	11歳	①織田信秀(信長の父)が稲葉山城の斎藤道三を攻めるが大敗。
1547	14歳	②濃姫、前美濃守護土岐頼武の息子頼純と結婚?
1549頃	16歳	④信長、濃姫(16歳)と結婚。
1550頃	17歳	⑤道三、美濃守護土岐頼芸を追放。
1553	20歳	信長と道三、尾張聖徳寺で会見。
1556	23歳	⑥道三、息子の義龍と戦い敗死(長良川の戦い)。
1567	34歳	⑦信長、稲葉山城を占領し、城主斎藤龍興を追放。居城を小牧山から移し、城の名を岐阜と改める。ポルトガル人のキリスト教宣教師ルイス・フロイス、京都の公家山科言継、岐阜の信長のもとを訪問。
1569	36歳	信長、家督を嫡子信忠に譲る。信長、居城を安土へ移す。
1575	42歳	本能寺の変。信長、信忠父子死亡。
1576	43歳	清須城主織田信雄、豊臣秀吉の転封命令を拒否し改易。
1582	49歳	関ヶ原合戦前哨戦で岐阜城落城(城主織田秀信)。
1590		
1600		

資料2 関連略系図



作成/内堀信雄 協力/井川祥子氏

とで美濃の実効支配を進めようとしたからでしょう。今日はこの説を前提にお話を進めていきたいと思えます。翌1547年、頼純は急死します。江戸時代の初めの伝承には道三に暗殺されたとありますが、その可能性は大いにあるでしょう(略系図③)。

頼純が亡くなった後濃姫は道三の元に帰ったようで、1549年頃に有名な織田信長との二度目の結婚に至ります(略系図④)。この結婚により、戦をしていた道三と信長の父・信秀は軍事同盟を結びます。土岐家の力を頼る必要がなくなつたためか、程なく土岐頼芸は国外に追放され、道三の「国盗り」が達成されました(略系図⑤)。さて、濃姫は信長に嫁入りしましたが、信長と道三はすぐには会っていません。直接会うのは1553年の「尾張聖徳寺の会見」です。この時2人はお互いを認め合ったようで、この後も協力関係を深めていきました。

しかし、道三は跡取りの義龍と仲が悪くなっていきました。一説には、義龍は実は土岐頼芸の息子だったからではと言われていますが、研究者は皆否定しています。そしてついに1556年、義龍と道三は長良川を挟んで親子で合戦

(長良川の戦い)となり、道三が負けて亡くなります(略系図⑥)。美濃の武将たちは道三方、義龍方の双方に分かれて戦いましたが、義龍を支持する者が圧倒的に多かったです。そして義龍の時代になります。

道三が合戦の前に「織田信長に美濃の国を譲る」と書いたとされる遺言状、いわゆる「国譲り状」が二通残っています。それを根拠に信長は美濃攻めをしたのだと言われていています。こうして、道三が亡くなった後、また美濃の国と尾張の国とは戦争状態、つまり信長と道三の息子の義龍の戦いに戻ってしまいました。当時の美濃は合戦に強く、信長はしつこく何度も攻めますが、なかなか攻め落とすことができません。しかし、ついに1567年8月、稲葉山城を占領したのです。この時、信長は34歳。稲葉山城主は、道三の孫の龍興(19歳)でした。龍興を追放し、信長は念願だった美濃の国を自分の領地にしました(略系図⑦)。信長は本拠地を岐阜に移し、それから足かけ10年間、岐阜市は「天下布武」の拠点として日本の中心の位置を占めました。

信長は、岐阜にきた翌年の1568年に、暗殺された室町幕府14

代將軍足利義輝の弟、足利義昭を擁して京都に上り、義昭を15代將軍に据えます。その後、信長に反対する多くの大名たちや將軍義昭自身とも戦い、天下統一を目指していくこととなります。1575年11月、信長は息子の信忠に岐阜城と家督、秘蔵の重宝、尾張・美濃二カ国を譲り、滋賀県(近江国)の安土城に移ります。しかし、天下統一目前だった1582年6月2日、突如起こった本能寺の変で、織田信長と信忠、二人とも死んでしまいます。

本能寺の変後、信長三男信孝が一時期城主になりますが、その後は羽柴(豊臣)秀吉の影響の強い武将が次々と岐阜城主となり、最後は信長孫の秀信が就任します。秀信は、1600年の関ヶ原合戦の前哨戦・岐阜城の戦いで、西軍石田三成方に付き、岐阜城は落城してしまいます。秀信は高野山に追放され、以後城が使われる事は二度とありませんでした。

3 濃姫(ノノ姫)

戦国の世、美濃の国の支配者は、土岐家から斎藤道三の斎藤家、信長の時代の織田家へと変わっていききました。濃姫はその全ての家々

に関わり、美濃の国の重要なキーパーソンでもありました。

(1) 歴史的事実

「濃姫」に関わる歴史的事実は3つあります。1つは1549年頃、織田信長と結婚したこと。これは間違いありません。

2つ目は、1569年にポルトガル人のキリスト教宣教師ルイス・フロイスが岐阜を訪れます。その時の記録が載っている『日本史』には、山麓の館に御殿があった。その2階に婦人(濃姫)の部屋があり、そこは他の部屋よりずっと豪華だったと書かれています。

3つ目は、フロイスと同年に岐阜を訪問した京都の公家山科言継の日記『言継卿記』に書かれているエピソードです。当時信長は名物茶器の収集、いわゆる「名物狩り」を盛んに行っていました。それは、自分の趣味というよりも「茶の湯御政道」として政治的に大いに利用するためでした。そして道三の息子・義龍の未亡人が持つていた茶壺に目を付けた信長は強引にそれを要求したのです。すると未亡人は「壺は戦乱のため紛失した。これ以上強引な態度に出るのなら自害します」と言い返しました。

4 フロイスの記録と信長公居館発掘調査

先述のフロイス『日本史』には、彼が岐阜に来た時に訪れた城や館町の様子が詳しく書かれています。信長の館は、現在の岐阜公園の山側にありました。居館の発掘調査を10年間続けていますが、その成果は、フロイスの記録とよく一致する事がわかってきました。まずフロイスの記録どおりに庭がたくさん見つかりました。それから中心になる建物があったことがわかりました。フロイスは書いていませんが、発掘調査によって屋根(棟)に金箔の瓦を使用した豪華な建物だったことがわかりました。フロイスは、この建物の2階に濃姫の部屋があったと書いています。実際に現地に行くとはわかりませんが、中心建物の位置からは城下町がよく見えます。町の人たちは御殿の濃姫の部屋を仰ぎ見ていたのではないかと想像します。きっと、濃姫は、城下の、美濃の国の人々のシンボリックな存在だったのではないのでしょうか。発掘では他に、滝が流れていた跡などが確認されています。

さらに「そうならば『信長本妻』に繋がる斎藤一族、斎藤家に仕えていた美濃の武将たちは皆自害する」と抵抗したのです。この「信長本妻」とは濃姫のことです。義龍未亡人と濃姫さらには美濃の武将たち(美濃衆)が一致団結して信長に立ち向かった様子が伺えます。そして、信長は壺を諦めたのです。濃姫についてはほとんど記録がないのですが、毅然として信長に對峙していることから、自分の考えをきちんと貫く女性だったのは間違いないと思います。また、濃姫の周りには斎藤一族や斎藤時代から仕えていた美濃の有力武将たちがたくさんいて、彼らの結束が強かったということがわかります。そして信長は濃姫や美濃衆にかなり気を遣っていたようです。

(2) 伝承

次に、江戸時代以降に濃姫はどのように伝えられたかですが、3つの伝承を紹介します。

まず、濃姫は「鷲山城」と呼ばれる一時期鷲山城に住んでいたと伝えられています。鷲山城は、山上には見張り台があった程度ですが、東山麓には広大なお濠と土塁で囲まれた中に御殿や庭園があったと考えられています。現在この御殿の場

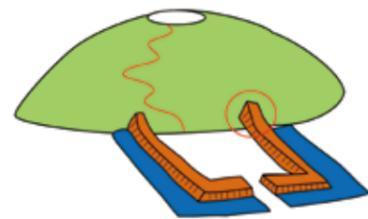


信長公居館跡

「金メッキした屏風で飾られた部屋」があったようです。後に秀吉が「黄金の茶室」を作りますが、その原型はこれではないかという研究者の指摘もあります。

5 おわり

尾張の一戦国大名に過ぎなかった織田信長は、美濃に来てからあつという間に天下統一目前まで突き進みます。彼は美濃の武将たち(美濃衆)の武力・軍事力が必要であり、そのために岐阜の人々を大



鷲山城の想像図

イラスト作成/内堀信雄

所に北野神社が建っています。

2番目は、常在寺に残されている国指定重要文化財の斎藤道三の肖像画についてですが、この絵は濃姫が寄進したと伝承されています。3番目は、西別院のすぐ東側にある西野不動尊というお堂がありますが、その広場には、濃姫の遺髪塚(お墓)だと伝えられている墓碑が残されています。

伝承、伝え聞く話は、いかにもありそうですがよくわからないことが多く、いずれも確証はありません。

(3) 学説

最後に、2人の研究者の濃姫に関する学説を紹介します。

歴史研究家・岡田正人氏は2つの説を述べています。a 1585切にしたのかもしれませんが、しかし濃姫を知ると、それだけではなような気がしてきました。濃姫の父斎藤道三は残酷で冷酷、裏切り、権謀術数に長けた人物というイメージが強い人物ですが、実は教養豊かな文化人で、茶の湯や庭づくりなどにも造詣が深く、京都最先端の茶の湯技術伝承者だったといわれています。もしかすると信長は濃姫さらには美濃衆を通じて美濃・岐阜が持つていた豊かな文化を吸収したのではないのでしょうか。そうであるなら岐阜市が1昨年認定された日本遺産『信長公のおもてなし』が息づく戦国城下町・岐阜の「信長公のおもてなし」は、もともと濃姫(道三)や美濃衆の影響を受けたものもかなりあったかもしれません。濃姫には未だ謎が多く、それが魅力でもあります。岐阜市では、まだ濃姫を岐阜の観光資源としてあまりアピールしていない気がします。この信長公岐阜入城・岐阜命名450周年を節目に、信長公と同様もしくは一緒に岐阜市の観光シンボルとして濃姫の魅力をPRしていく必要があるのではないのでしょうか。そのため、今後より一層濃姫に関して調べていきたいと考えております。